

【ソコデカラ】

～田舎・農家の底力で地域活性&貢献～

JA うつのみや青壮年部 南河内支部 上野 和則

1. 下野市（旧南河内町）の概要

我々の地元、栃木県下野市は栃木県南部に位置する、人口約6万人の小さな都市です。

平成の大合併により、旧南河内町、旧石橋町、旧国分寺町という3町が合併し、現在の下野市となりました。町には駅名にもなっている「自治医科大学病院」という大きな医療施設もあります。我々が住む旧南河内町地区は、国道4号線バイパスを境に農村地域と住宅地域がキレイに分かれていて、農村地域では特産物の「かんぴょう」の他、米を中心にイチゴやキュウリなどの施設野菜もたくさん作られています。

2. 南河内支部について

そんな小さな町、旧南河内町にあるJA うつのみや青壮年部南河内支部は総勢35名。昔から学童野球が盛んな地域で、その名残もありJA 栃木青年部連盟の野球大会では「JA うつのみや代表」として毎年参加しています。その結果、野球大会を通じて結束力が強化され、若手からベテランまで、とてもまとまっている組織であると思います。また、盟友の既婚率が高く、8割が既婚&子育て世代の仲間達となっております。

3. 子供達が喜ぶ活動を。地域に貢献できる活動を。

そんな青壮年部活動の中で、ここ近年一部の部員から「今までにない、もっと地域に貢献できて、子供達に良い影響を与えられそうな活動ができないか？」という意見があがっていました。当支部の地元での主な活動は「野球大会&地元JAの感謝祭に参加」くらいでしたから、【もっと子供達に喜んでもらえる形を！】【もっと地域に貢献できそうな活動を！】といってもなかなか思いつくものがありません。しかしそんな中で、地元を盛り上げる「お祭り」を企画している部員がおり、そこから「青壮年部も参加して一緒に盛り上げませんか？」というオファーを頂きました。

4. 第一のコンテンツは「農業」

その「祭り」の題名は【吉田村まつり】。先ほどの地図でいう「農村地域」の、極東部に位置する「吉田地区」という場所で開催するお祭りです。人口減少・児童数低下・高齢化といった「農村社会の縮図」ともいえる【ど田舎】で、我々が小学生くらいの頃は、地元JAが運営していたガソリンスタンドやスーパーのような施設がありましたが、単協の合併&支所の統合による合理化により、ここ数年までは管轄JAが「遊休資産（単にそのままにしてある資産）」として所有している「JA支所」の建物と、昔は米などの貯蔵に使った「石蔵&空き地」のみ。これらが「空き物件」になってからは、我々住民ですら近寄らない場所になってしまいました。しかし2年前に後輩がUターンしてきて、この場所にお洒落なイタリアンレストランを開店させたことがきっかけで、この地域に新たな動きが生まれてきました。管轄JAが所有している石蔵&広場。その場所を使い、我々地元民が「この地域は、この地元は、価値がある場所だ！」と伝えられるような素敵なお祭りを作りたいという趣旨のもと。そして、この何もない【ど田舎】で表現できるコンテンツは【農業】だ！という趣旨のもと、農家である我々JA青壮年部にもお声が掛かったという流れです。そこで、この祭りを当支部の活動として「一緒に盛り上げよう！」と動きはじめました。

5. 美味しい・楽しい・オシャレ感

まずこの祭りの実行委員会に、部員の数名に参加してもらい、連絡体制を密にしました。実行委員会は、老若男女かつ異業種のメンバー（デザイナーやプランナー、建築家、大学教授など）で構成されており、そこに当支部（農家）も加わる形となりました。実行委員会と青壮年部がLINEで繋がり、忙しい農繁期でもオンラインで情報を共有し、どういった祭りにしていくか？をじっくり協議していきました。最終的に、この祭りのテーマは「食の祭典」ということで、「農業」をコンテンツの中心におき、当支部メンバーが主役となって盛り上げ、来場者に「田舎の雰囲気」を感じてもらいつつ、来て下さったお客様の想像を越えるような「オシャレで！美味しく！面白い！」そして「子供達にも喜んでもらえる祭りにする」という方向で準備を進めていくことになりました。

① 飲食店へのオファー

まずは「食」です。オシャレで美味しいお祭りには、それ相応の飲食店のネームバリューとお料理の完成度が求められます。幸いな事に当地域は「美味しいお米・野菜が採れる地域」でもあり、県内外の有名飲食店と取引のある部員が数名おりました。今回は彼らにお願いして、各々の取引先へ出店を要請したところ、結果的に4件の優良飲食店から出店のGOサインをいただきました。

② マルシェ

また、地元農産物の良さを伝える「マルシェ」を開く。ということで、来てくれたお客様と我々農家が【秋の収穫を喜ぶ祭り】という感じで演出するように準備しました。また、個人的に「石窯」を持っている部員がおり、その石窯を使って美味しいピザを作ることになりました。

③ 会場作り

また、田舎の雰囲気・空間をしっかりと作り込むために、実行委員会より「お米のはざかけ」のような壁を作りたいという要請がありました。「はざかけ」をまともにやるとなると、その後の脱穀や調整作業も含め、農繁期の我々にはなかなか出来ないということで、コンバインから出る「藁」を結束して、「はざかけ風パーテーション」というカタチにしました。

また、地元の大工さんなどをお願いして、会場のテーブルや椅子を、我々が持っている「収穫コンテナ」とコラボさせたりして、予算をかけずに「田舎風」を演出しました。

④ 「食」以外のテーマとして

「食」の他の重要なファクターに「音楽」を取り入れました。これは、出店する飲食店がよく招聘しているプロのアイリッシュバンドにオファーをし、快諾していただきました。また「子供達が喜ぶ事」という部分で、近隣に住んでいた「ワークショップ」をイベントとして手がけるプロの方に、「親子で作ろう。ワークショップ」というブースを設け、おしゃれな雑貨を親子で楽しく手作りしてもらうように要請しました。その他、近隣かつ雰囲気に合いそうな「雑貨屋さん」「お菓子屋さん」「お花屋さん」などにも声をかけ、参加を快諾して頂きました。



* はざかけ風パーテーションの設置



* ピザ釜の設置

6. 祭りがスタート！

そして10/4。いよいよ【吉田村まつり】がスタートです。我々は「白のTシャツに、オシャレな緑の手ぬぐい」というコスチュームでお客様をお迎えしました。実行委員会の「スタート」の合図とともに、アイリッシュバンドによる生演奏。各売り場が活気に満ちあふれます。マルシェコーナーでは、リンゴやブドウ、梨といった果物をメインに、「秋」を感じさせるレイアウトにしました。「ミニトマト」はお客様に自分で買いたい分をデジタル表示の秤に乗せてもらい、秤の表示末尾2桁が「00」だったら無料！といったアトラクションも設けました。結果、1名のお客様が無料でミニトマトをゲット。量り売りは手間がかかりますが、その分お客様と会話でふれ合う「時間」を共有できます。ミニトマトは味も非常に好評で、40kgがたった1時間半で完売してしまいました。また、ピザコーナーではマルゲリータをベースに、盟友が作る中玉トマトやナス、シイタケ、豚肉などをグリルし、ピザの焼き上がりにマッチするようにして提供しました。「地元ならではのピザ」というカタチでお客様に提供し、出店している飲食店の料理に負けないくらい大変好評でした。おかげさまで農産物コーナーも、ピザコーナーも大盛況。飲食店のブースも、他の雑貨・花ブースも、ワークショップブースも、沢山の人が盛り上がっていました。「はぎかけ風パーティー」も、いい感じに空間を演出でき、その雰囲気の中には、常にアイリッシュバンドやバグパイプの演奏が流れ・・・この場所が「もはや日本ではないのでは？」とってしまうくらいに感じる異空間を演出することができました。来場者のメイン世代が我々と同じくらいの子育て世代でしたので、子供達の笑顔も特に印象に残りました。

その様子を少しだけ映像でごらんください→ビデオ映像。

不思議な空間の中でお客様が飲食ブースや雑貨ブースに集まってきます。アイリッシュの音色に釣られて踊り出すお客様。それに釣られて踊り出す子供達。出店者のスタッフさんもノリノリ。来場されたお客様からは「オシャレ」「素敵」「美味しい」「楽しい」という。こんな田舎では、なかなか聞くことができないワードが響き渡ります。



* 沢山の人が賑わう広場



* 盟友のトマト・ナス・豚肉入りピザ

この日は結果的に、ピザと農産物で 30 万円近い売り上げを出すことができました。他の飲食店ブースなども含めたらこの一日で 200 万円近い売り上げがあったと実行委員会からの報告もありました。来場者は 2,000 人以上。当支部の参加人数とか仕入れ額で考えれば、大して「儲かる」祭りではありませんでしたが、我々の上の世代が「遊休させておいただけ」の場所が、我々世代の活躍によってこれだけの「価値」を示すことができたのです。今回の成果は、当支部にとっても【子供達の「憧れ」や「地元愛」を目覚めさせる一つのきっかけになるのでは?】と考えさせられる機会にもなりました。

また、課題もしっかりと浮き彫りになりました。

それは駐車場の少なさと交通整理スタッフの少なさでした。想定以上の来場者とはいえ、近くに公共交通機関が無い「ど田舎」なので、その分駐車場を広く確保しておかねばなりません。その辺の見込みがまだまだ甘く駐車場が大混雑。その交通整理をする人がもっと必要でした。この日は、吉田地区のメインロードを渋滞させてしまい google マップで赤く表示されるといいう、吉田地区としては前代未聞の事を成し遂げることができましたが、それと同時に近隣住民にもご迷惑をかけてしまいました。来年は、近隣の農地を借りて 1 日だけの駐車場を設営したり、交通整理スタッフを増員したりすることで、今回以上に皆で協力して、近隣住民や来場者にストレスの無い、もっと心地よく楽しめる祭りにしていこうと思いました。

7. 地域にも貢献

また、最初に説明したように、地元には大きな大学病院があり、そこには大病のために外に出られず闘病の日々を送る子供達も入院しています。我々が元気に農業をして、青壮年部活動をしている同じ地域で、そんなお子さんの世話をしながら不安な毎日を送られているお父さん・お母さんがいることを忘れてはなりません。そんな、遠方からの闘病入院生活をする家族の支援をしている「ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティー・ジャパン」さんに、微力ながら今回の売り上げの一部を寄付させて頂きました。農業と地域。そして、この場所で「我々ができること」について、真剣に考える機会にもなった事をご報告させて頂きます。

8. 最後に

今回のまつりを通じて感じたのは、まず「我々にできる事は限られている」という事です。実行委員会のメンバーは、我々のような「農家」では考えもつかないアイデアや、コネクション、そしてセンスやスキルを持っていて、我々だけでは絶対にできないようなイベントを演出できる凄さを実感しました。宣伝なども素晴らしく、我々だけではこれだけの来場者を呼ぶこ

とはできなかったと思います。これは彼らとの「連携」でなければ為し得ませんでした。イベントに注力できる時間も農繁期と重なり限られていましたので、いろんな業種の人で協力しあう大切さを、より実感できました。また逆に言えば、今回のマルシェや飲食店コネクション、はざかけ、機材・備品の調達（インパクトドライバーやドラムリール、フォークリフト、収穫カゴなど）は、このような祭りを開催する上で我々が持っている「強み」でもあると実感させられました。【農家のポテンシャルが高い！】という事を証明できました。

次に感じたのは「我々の【地元】も【仕事】も捨てたものじゃない」という事です。田舎には田舎の良さがあり、近隣には一緒に絡むと素晴らしい相乗効果が出せそうな異業種が住んでいたりします。そういった方達と繋がる機会を作るために、自らが歩み出せば、これから先も子供達に自慢ができる「地元」を我々世代が創りあげていけるのではないのでしょうか。

「田舎」・「農家」には、まだまだそんな「ソコチカラ」が残っていると思うのです。

我々のような「ど田舎」「過疎化」というキーワードが似合う地域は、きっと全国にも沢山あると思います。でも、「ちょっと視点を変える」というか「視点を変えられる仲間」を自らが率先して作っていけば、きっと「新たな魅力」を発見できたり、「他に自慢できるイベント」を開催できたりするのだと思います。その「魅力」や「イベント」が、きっと次の世代・・・【子供達の未来】につながります。我々世代がこれからもずっと【この土地に生きる農家】として、子供達に「地元の魅力」を伝え、そこから段階的に「農業の素晴らしさ」「食の大切さ」、更にそこから「稼業である農業の大切さ」を伝えることができ、結果的に「後継者不足」などの問題解決にもつながるのではないか？と思うのです。

ちょっと大きすぎるお話までしてしまいましたが・・・

これからも地元青壮年部の一員として・・・また盟友の皆様との交流を通じて、こういった活動がもっともっと広がるように。また「農業」・「地元」の新たな価値が創出できる活動が生まれるよう努めてまいりたいと思います。

小さな支部活動で生まれた小さな奇跡。他支部や県・全国至る所で「ソコチカラ」が発揮できるような「農業」になることを！！！！

以上で発表を終わります。

ご静聴ありがとうございました。